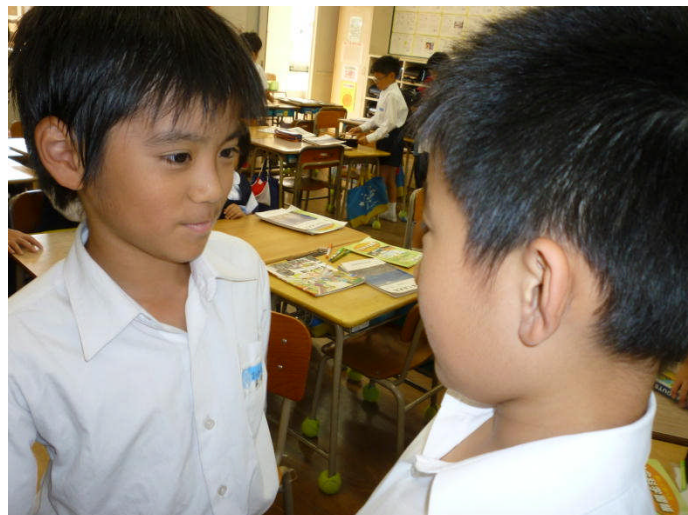


鹿児島県総合教育センター
平成24年度長期研修研究報告書

研究主題

共に学び合う姿を目指した「交流及び共同学習」
—子どもが分かる・できる喜びを味わうことができる
教師の連携と指導の在り方—



鹿児島市立山下小学校
教諭 前田 博美

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	1
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画(構想図)	2
III	研究の実際	
1	研究主題について	2
(1)	「共に学び合う姿」とは	2
(2)	交流及び共同学習とは	3
(3)	本校の交流及び共同学習の教育課程への位置付け	4
(4)	関係する教師間の連携と子どもへの指導	4
2	本校における交流及び共同学習の実施状況と教師の意識調査	4
(1)	実施状況・意識調査の概要	4
(2)	交流及び共同学習の実施状況・意識調査の結果と考察	5
(3)	交流及び共同学習の実施状況等調査からのまとめ	8
3	関係する教師間の連携と子どもへの指導の在り方	9
(1)	学習環境の整備と特別支援学級の子どもの実態把握	9
(2)	連携と指導の基本的な考え方	10
4	授業による研究の検証	15
(1)	検証授業のねらい	15
(2)	検証授業の概要	15
(3)	連携に基づく指導	16
(4)	検証授業Ⅰ（3年理科）の実際	18
(5)	検証授業Ⅰの考察	22
(6)	検証授業Ⅱ（3年社会科）の実際	23
(7)	検証授業Ⅱの考察	27
IV	研究のまとめ	28
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

〈引用・参考文献〉

I 研究主題設定の理由

障害のあるなしに関わらず、子どもたちが互いに相手のことを尊重し、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むと同時に、共に活動する中で相手のことを思いながら行動できるような力を身に付けさせ、望ましい集団において学習を進めていくことが教育の場において求められている。中央教育審議会（平成24年7月）において、『『共生社会』とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。』と示されている。このような社会的状況下において、障害のある子どもと障害のない子どもが共に活動する交流及び共同学習を、積極的に推進することは極めて重要である。

本校では、これまでに特別支援学級に在籍する子どもに、複数の教科において交流及び共同学習を実施しているが、情報の交換や共有が円滑に進められないなど、教師間の連携の在り方に課題が見られる。また、特別支援学級に在籍する子どもは、交流及び共同学習の時間においても交流学級の子どもと関わりながら分かったり、できるようになりたいという思いをもっているが、具体的な働き掛けや、交流の方法を明確にもてないなど、指導の在り方にも課題がある。子ども一人一人の教育的ニーズに応じながら、交流及び共同学習を円滑に進める考え方や、教師間の連携と具体的な指導の在り方についての整理が必要である。

そこで、特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等が、子どもの実態や授業について話し合って共通理解を図り、個別の指導計画や指導方法などについての情報を共有することで、指導の充実を進められるよう、「連携と指導の在り方」を明確にしたいと考えた。具体的には交流及び共同学習において、特別支援学級に在籍する子どもが特別支援学級で身に付けたことを生かしたり、特別支援学級及び交流学級双方の子どもが、互いに困っている状況を見て言葉を掛け合ったり、自分の思いや考えを相手に分かるように伝えたりすることができるよう、適切な指導を行うことができるようにすることである。次に、「連携と指導の在り方」を明確にした上で、特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等が共通理解をしていくことが必要である。共通実践においては、学習内容を検討し、学習環境（人的環境・物的環境）を整えていくことが重要であり、それらを通して特別支援学級の子どもが分かる・できる喜びを味わうことができるような授業をつくることができると考える。さらに、特別支援学級と交流学級に在籍する子どもが、互いに相手の気持ち思いやるような自然な言葉掛けをしたり、よさを認め合ったりするなどの態度にも着目し、教師の働き掛けを工夫していきたい。

このように、特別支援学級に在籍する子どもだけでなく交流学級の子どもが、共に学び合うことを目指す交流及び共同学習の研究を行うことは、共生社会の実現に向けての第一歩として意義深いものになるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の構想

1 研究のねらい

- (1) 実態調査を基に、特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等との連携と子どもへの指導の在り方について、課題を明らかにする。
- (2) 子どもの学び合う姿を整理し、特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等との連携と、子どもへの指導の在り方について明らかにする。
- (3) 検証授業を通して仮説の検証を行い、研究の成果と今後の課題を明らかにする。

2 研究の仮説

特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等（以下、関係する教師）との連携と子どもへの指導の在り方を明確にし、交流及び共同学習の場で指導の内容等を工夫したり、学習環境（人的環境や物的環境）を整備したりすることによって、子どもは分かる・できる喜びを味わい、共に学び合う姿を目指すことができるのではないかと。

3 研究の計画（構想図）

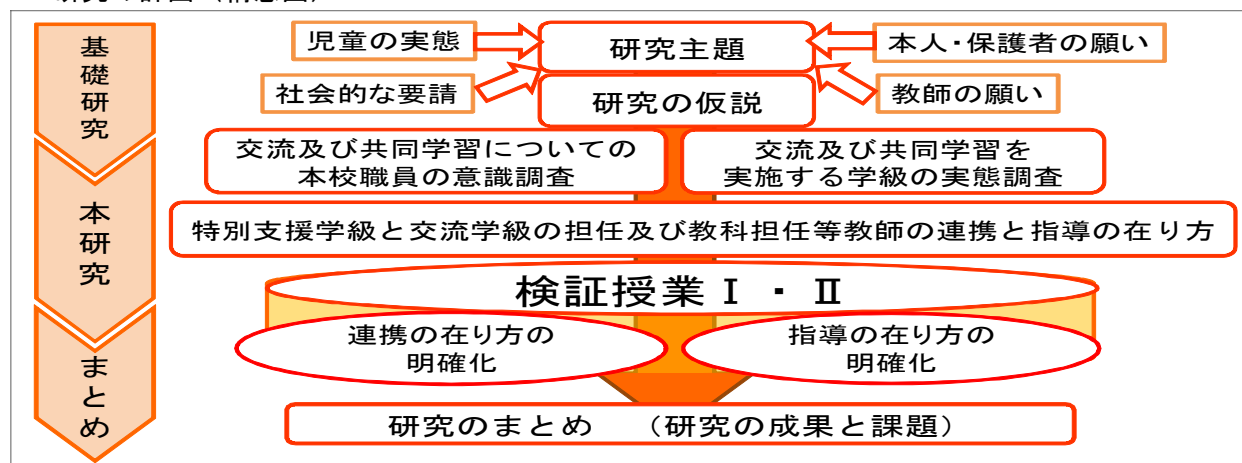


図1 研究構想図

Ⅲ 研究の実際

1 研究主題について

(1) 「共に学び合う姿」とは

研究主題に設定した、「共に学び合う姿」とは、特別支援学級と交流学級に在籍する子どもが、互いのことを分かり合い、尊重し合いながら、協力し合って学習し、よりよい生活を送る姿であると捉えた（図2）。

また、「子どもが分かる・できる喜びを味わう」とは、学校内の様々な生活場面において、特別支援学級に在籍する子どもが教育的ニーズに応じた教師の指導や交流学級の子どもたちとの関わりなどを通して、学習の内容等が分かたり、自分の力で問題を解決できたりする喜びを味わう姿であると捉えた（図3）。

交流及び共同学習の場において、特別支援学級に在籍する子どもが分かる・できる喜びを味わい、交流学級担任にほめられたり、交流学級に在籍する子どもに認められたりしながら、成功体験を何度も繰り返し経験することができるような適切な指導が大切であるとする。成功体験は、分かりたい、できるようになりたいという学習への



図2 共に学び合う姿とは

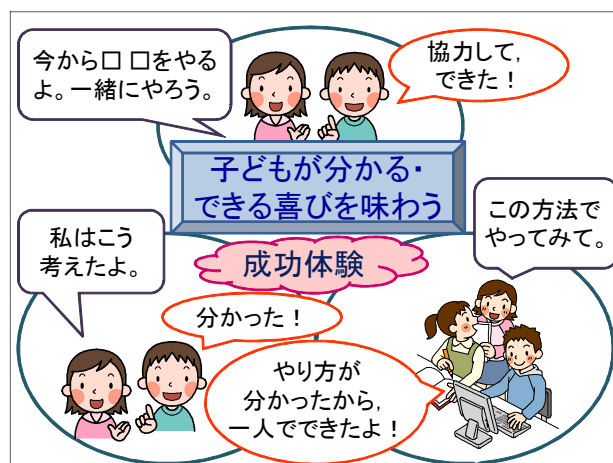


図3 子どもが分かる・できる喜びを味わうとは

更なる意欲につながり、そこに、教師の適切な指導や子ども相互の関わり合いがあることによって、分かった、できたという喜びは更に深まると考えられる。

このように、特別支援学級に在籍する子どもが分かる・できる喜びを様々な機会に味わい、交流学級に在籍する子どもと「共に学び合う姿」を目指し、交流及び共同学習を充実させる必要がある。

(2) 交流及び共同学習とは

障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶ交流及び共同学習には、小・中学校と特別支援学校との間で実施するもの（図4）や、小・中学校の特別支援学級に在籍する子どもが通常の学級（交流学級）で活動を共にするものなどがある（図5）。本研究においては、小学校の特別支援学級に在籍する子どもが、交流学級で活動を行う交流及び共同学習について取り組むことにした。

平成20年3月に告示された小学校学習指導要領の総則に、交流及び共同学習が次のように明記された（中学校においても同様の表記がある）。

障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習は、児童が障害のある幼児児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深めるための絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場でもあると考えられる。

さらに、交流及び共同学習においては、「相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面がある」^{*1}ことから、相互の触れ合いを進めるとともに子どもの実態に応じて教科等の目標を設定し、達成していくように努力することも求められている。

交流及び共同学習の指導をする本校の交流学級の担任の願いとしても、「特別支援学級に在籍する子どもにもっと教科等の学習の楽しさを味わわせたい。」「特別支援学級に在籍する子どもが分かる・できるような手立てを工夫したいが、どのように進めればよいか迷っている。」などの声を聞くことがあった。特別支援学級に在籍する子どもが、交流学級に在籍する子どもと場を共有することだけが中心となってしまうような取組ではなく、共に分かる・できる喜びを味わうことができるような状況をつくっていく取組が必要である。そのためには、交流及び共同学習を行う際に、特別支援学級の担任として、交流学級の担任に積極的に働き掛け、両者の専門性を生かしながら一緒に授業づくりをするなど、協力して実践できるような連携の体制をつくることが重要である。

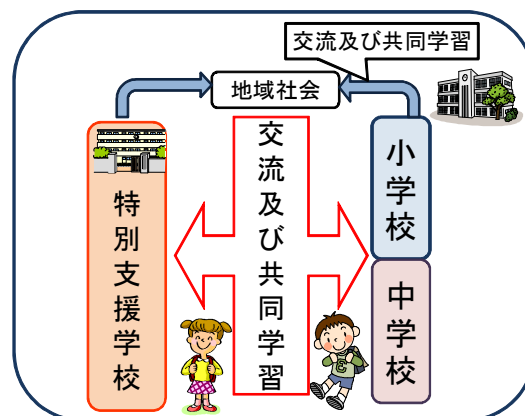


図4 交流及び共同学習の取組



図5 本研究における交流及び共同学習の取組

*1 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説

(3) 本校の交流及び共同学習の教育課程への位置付け

これまで、本校の交流教育においては、「障害のある子どもとの関わりを通して、相手のことを認め、受け入れる心を育成するとともに、お互いに思いやりをもって関わり合うことの大切さを理解するための指導」と「障害や障害のある子どもを正しく理解するための指導」に重点を置いて実施してきた。具体的には、交流教育の指導計画について、特別支援教育の全体計画の中に、以下のように位置付けて実践してきている。

【交流教育】

- ① 障害のある子どもとの関わりを通して、相手のことを認め、受け入れる心を育成するとともに、お互いに思いやりをもって関わり合うことの大切さを理解するための指導
- ② 障害や障害のある子どもを正しく理解するための指導
 - ・ 在籍児や通級児との学校生活全体を通した相手を思いやる優しく豊かな心の交流
 - ・ 学級活動など、特設した時間を利用しての交流
 - ・ 特別支援学校などとの交流

特別支援学級に在籍している子どもの多くが、交流教育を経験しており、さらに、現在の交流及び共同学習においても教科等をはじめ、全校集会や給食など、学校生活の全般において障害のある子どもと障害のない子どもとが活動を共にする機会が多い。本校教師や交流学級に在籍する子どもも、特別支援学級に在籍する子どもとの交流及び共同学習は、日常的でごく当然のこととなっている。

したがって、これまでの交流教育を、交流の側面と教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面から捉え直し、交流及び共同学習として教育課程に位置付けて実施していくことが必要であると考ええる。

(4) 関係する教師間の連携と子どもへの指導

平成18年3月に独立行政法人国立特殊教育総合研究所（現：国立特別支援教育総合研究所）が全国に調査を行った、「交流及び共同学習」に関する報告書によると、特別支援学級における課題として、「特別支援学級担任の付添いの問題」、「交流学級の担任や児童生徒の意識や理解について」ということが多く挙がってきている。このような状況を踏まえると、交流及び共同学習の指導に関係する教師が連携を図り、協力して授業づくりを進め、共に指導する体制を整えるようにすることが、全国的にも必要であることが分かる。

交流及び共同学習を取り組みやすくしていくとともに、実施後に随時、見直しや改善を行うことで、より充実した取組を行うことができると考える。

そこで、以上のようなことから本校の現状と課題を明らかにし、具体的な取組について検証していくことにした。

2 本校における交流及び共同学習の実施状況と教師の意識調査

(1) 実施状況・意識調査の概要

ア 調査の目的

交流及び共同学習における、これまでの取組と成果等、今後の取組の方向性及び子どもに身に付けさせたいことについての本校の実施状況や教師の意識を明らかにする。

イ 調査の対象

本校教師27人

ウ 調査の時期

平成24年6月中旬

エ 調査の方法

質問紙による実施状況及び意識調査（交流及び共同学習における指導の経験がある本校教師に実施した。※の項目は、交流及び共同学習における指導の経験がない教師にも実施した。）

オ 調査の内容

(ア) 本校教師の交流及び共同学習実施の状況及び理解についての調査

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 担当学年及び経験年数，特別支援学級担任の経験・ 交流及び共同学習を実施する学級の指導の経験・ 交流及び共同学習の趣旨や内容についての理解 |
|--|

(イ) 交流及び共同学習についての意識調査内容

- | |
|---|
| <p>○ 特別支援学級の子どもについて</p> <ul style="list-style-type: none">・ 特別支援学級の子どもに身に付けてほしいこと（※）・ 特別支援学級の子どもに身に付いたこと |
| <p>○ 交流学級の子どもについて</p> <ul style="list-style-type: none">・ 交流学級の子どもに期待すること（※）・ 交流学級の子どもに身に付いたこと |
| <p>○ 教科等について</p> <ul style="list-style-type: none">・ 交流及び共同学習を実施しやすい教科等・ 交流及び共同学習を実施しにくい教科等についての理由 |
| <p>○ 関係する教師間の連携について</p> <ul style="list-style-type: none">・ 交流及び共同学習の実施の際の特別支援学級担任と交流学級の担任や教科担任等教師間で取り組んだ連携・ 交流及び共同学習の実施の際に特別支援学級担任と交流学級の担任や教科担任等教師間で必要だと思われる連携（※） |
| <p>○ 取り組んだ指導について</p> <ul style="list-style-type: none">・ 特別支援学級の子どもが交流学級で学習する際に実施した支援の工夫・ 子ども相互に認め合うことができるような学級での取組（※）・ 障害理解教育の視点について（※）・ 交流及び共同学習の充実を進める取組（※） |

(2) 交流及び共同学習の実施状況・意識調査の結果と考察

ア 本校教師の実施状況及び理解についての調査

本校教師27人を対象に交流及び共同学習に関する実施状況・意識調査を行い，100％の回答を得た。以前，交流及び共同学習の指導をした経験がある教師は，21人であった。

交流及び共同学習の基本的な考え方についての問いにおいては，「知っている」，「大体知っている」，「聞いたことはあるがあまり分からない」の3段階の回答項目を設定した。そのうち，「知っている」という回答が約7％，「大体知っている」という回答が約37％であり，合わせると，本校教師の約44％であった。本校教師の半数以上が，交流及び共同学習について「聞いたことはあるがあまり分からない」を選択している。このことは，交流及び共同学習についての研修の回数が少なかったことや，以前の交流教育に引き続き，特別支援学級の担任も子どもも「交流」などと日常的に使っていることなどが考えられる。交流及び共同学習に関する研修の機会を設け，正しく理解できるようにするとともに，具体的な指導について明らかにする必要があると考えられる。

イ 特別支援学級の子どもが身に付けてほしいこと・身に付いたこと

本校教師27人のうち，以前，交流及び共同学習において，指導をした経験がある教師21人に以下のような意識調査を実施した。

特別支援学級の子どもが交流及び共同学習を実施して身に付いたと思われることについての問いでは、「子ども相互の関わり方」、「友達の影響で頑張る気持ち」という回答が多かった（図6）。また、特別支援学級の子どもに身に付けてほしいことについての問いでは、身に付いたことと同様に「子ども相互の関わり方」であったが、次に多かった回答は、「互いのよさを認め合う態度」であった。

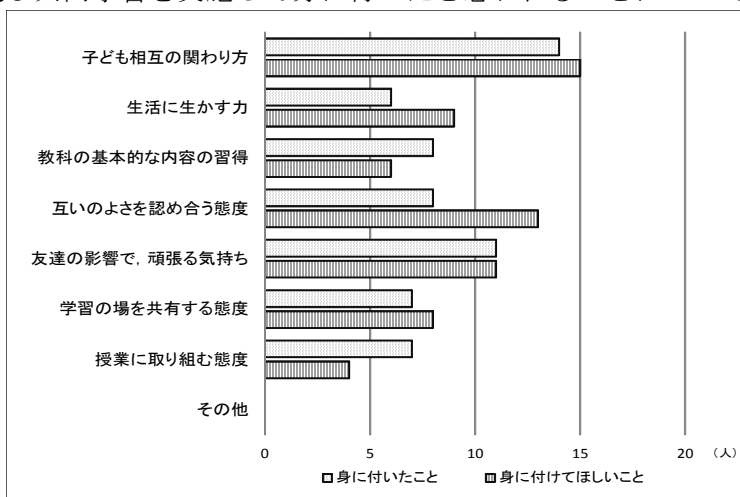


図6 特別支援学級の子どもが身に付けてほしいこと・身に付いたこと（複数回答）

さらに、交流及び共同学習の指導をした経験がない教師6人に対して、特別支援学級の子どもに身に付けてほしいことについての意識調査を実施したところ、全員が、「子ども相互の関わり方」を身に付けてほしいとの回答を得た。子ども相互の関わり方を身に付けてほしいという、指導する教師の願いを大切にしながら交流及び共同学習を実施していく必要がある。

一方、交流及び共同学習の目的の一つの側面である、教科等の基本的な内容について身に付けてほしいと思っている教師は少ないことが分かる。また、身に付いたことの問いでは、「生活に生かす」ことの回答が最も低いことから、特別支援学級の子どもが交流及び共同学習において学んだことを、将来的に生活に生かすことができるような指導の工夫をしていく必要があると考えられる。

ウ 交流学級の子どもに期待すること・身に付いたこと

調査項目イと同様に、以前、交流及び共同学習における指導をした経験がある教師21人に以下のように意識調査を実施した。

交流学級の子どもについて、交流及び共同学習を実施して身に付いたこととしては、「子ども相互の関わり方」が最も多く、次に「誰とでも親切にし合う気持ち」であった。交流学級の子どもに期待することとしては、「互いのよさを認め合う態度」

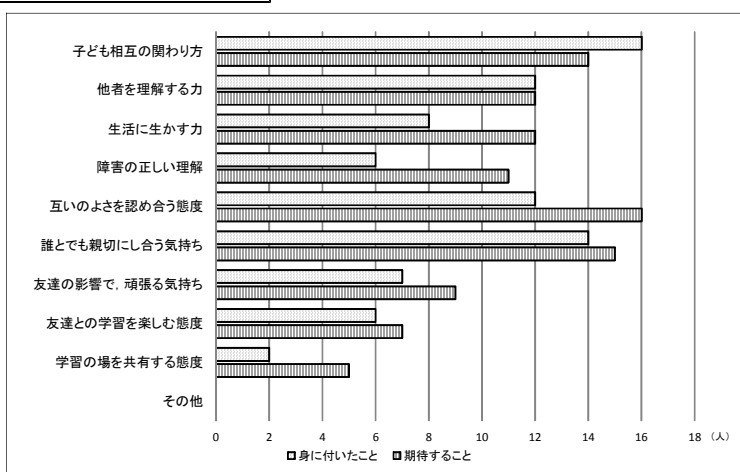


図7 交流学級の子どもに期待すること・身に付いたこと（複数回答）

が最も多く、次いで「誰とでも親切にし合う気持ち」であった（図7）。

また、交流及び共同学習の指導の経験がない教師6人に対して実施した、交流学級の子どもに期待することについての意識調査では、5人の教師から「子ども相互の関わり方」、「誰とでも親切にし合う気持ち」を期待するとの回答を得た。

交流学級の子どもに身に付いたことでは、「子ども相互の関わり方」の回答が多く、期待することとしては「互いのよさを認め合う態度」の回答が多かった。また、「障害の正しい理解」について、身に付いたことと期待することに差があることが分かる。障害について正しく理解できるようにするためには、特別支援学級の子どものよさや頑張っていることなど

が交流学級の子どもに分かるように指導することが大切であると考える。

さらに、交流及び共同学習を実施していく中で大切にしていきたい「生活に生かす」ことについて、身に付いていると感じている教師は3割程度である。このことから、「生活に生かす」とはどういうことなのかを、教師間で意見交換し合って具体的なイメージをもち、学校生活全般において同じ目標を設定して積極的に指導していく必要があると考えられる。

エ 交流及び共同学習における指導を行う際に必要な連携

交流及び共同学習を実施する際、特別支援学級の担任と関係する教師間で必要だと思う連携方法や内容についての問いでは、「個別の指導計画等で実態を共有する。」という回答が多かった（図8）。

また、その他の欄に「学年会等での時間確保が難しいため、関係する教師間の授業前の打合せが必要である。」「年度当初に、子どもの特性などをまとめてあると助かる。」という記述もあった。多くの教師が、何らかの方法で連携を図り、該当する子どもの実態を知必要があると思っていることが分かる。

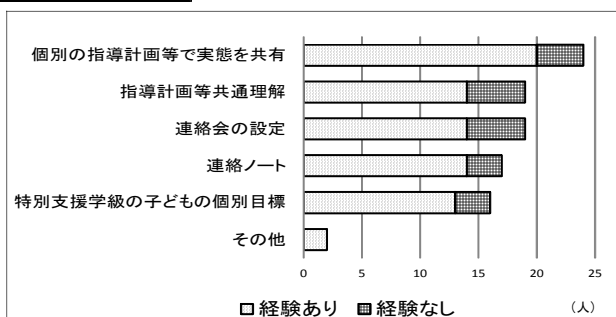


図8 交流及び共同学習の指導の際に必要な連携（複数回答）

オ 交流及び共同学習を実施しやすい教科等

交流及び共同学習を実施しやすい教科等については、図画工作、音楽、体育などの回答が多かった（図9）。その理由として、具体物の操作や観察、身体的な表現などの体験活動を多く取り入れることが可能で、子ども相互の関わり合いも多く、話し合ったり、助け合ったりする場面を設定できる教科であることが考えられる。一方、交流及び共同学習を実施しにくい教科等については、理科や社会などの回答が多かった。このような教科等においても、具体物の操作や観察、身体的な表現を取り入れるなどして、特別支援学級と交流学級の子どもが関わり合うことができるような場面を工夫することで、学習が容易になり、学びも深まると考えられる。子ども相互の関わり合いが多い授業にしていくために、関係する教師間で話し合い、意図的に関わり合いが多い授業づくりをしていくことが望まれる。

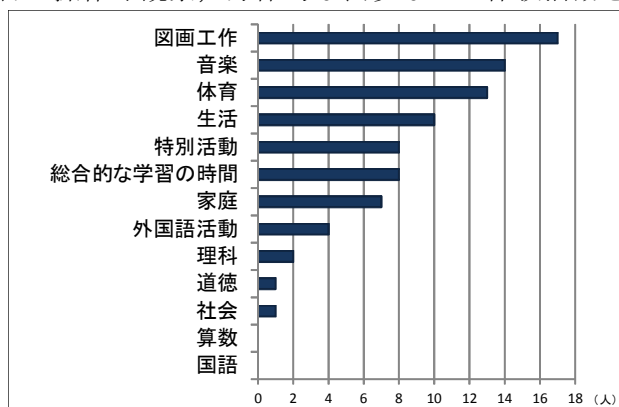


図9 交流及び共同学習を実施しやすい教科（複数回答）

カ 交流及び共同学習の充実を進める取組

交流及び共同学習は、小学校の教育活動の様々な場面で実施されている。しかし、指導計画が細かく作成されていなかったり、特別支援学級の子どもの特性などに応じた指導方針などが、共通理解されていなかったりする現状がみられる。また、交流学級の担任や教科担任等の思いや学級経営方針などの違いによって、その取組み方も異なる。そこで、交流及び共同学習の充実を期待する取組について、表1のように自由記述の形式で回答を得た。

表 1 交流及び共同学習の充実を進める取組

項 目	具体的な内容
障害に対する理解促進に関すること	・ 障害は個性であることを子どもに早い時期から教え、相互理解を図るようにすること ・ 障害理解教育に係る授業を実施する（個性や得意なこと、特性などに視点を当てた授業） ・ 保護者への啓発を図り、障害や障害者への理解を深めるようにすること
特別支援学級の子どもの実態把握に関すること	・ 教師が、子どもの実態をしっかりと把握すること ・ 教師自らが、障害や障害者理解に積極的に努めること（諸資料の積極的な活用を図ることなど） ・ 子どもの特性などをまとめた資料を活用すること
教師間の連携に関すること	・ 特別支援教育支援員などが付いて、子どもが一人ではできない部分を支援し、交流学級の中で活動しやすくすること ・ 担当の教師同士が、子どもにどんな力を身に付けさせたいのか、そのためにはどのような方策をとるのかということ、じっくり話し合う場を確保すること ・ 交流学級担任と特別支援学級担任で語る場を月に1回でも設定すること ・ 交流学級の担任として、取組が可能な働き掛けについて情報を得ること
特別支援学級担任・交流学級担任の指導に関すること	・ 特別支援学級の担任として何ができるか（子どもが充実した生活を送るために）を分かり、できる範囲で努力すること ・ 交流学級の子どもの学習の理解が深まる手立てについて知ること ・ 約束カード（「書く」や「聞く」など）や、グループで話し合う際のワークシートの工夫など、交流学級の子どものにも有効な指導法について研修を深めること ・ 子どもたちの理解や意欲の高まりが継続できる指導について知ること ・ 充実につながるよう、教師が同じ方向を向いて指導すること ・ 子ども相互の関わりを授業以外でも広げられるような取組、あるいは成果を出す方法について知ること ・ 特別支援学級の子どものと交流学級の子どものとの関わりが、自然と生まれるような取組を工夫すること

回答された意見を整理すると、「交流学級担任と特別支援学級担任の話合いの場を設定すること」、「指導する教師が、特別支援学級と交流学級の子どものにとって有効な指導を工夫すること」、「特別支援学級の担任が努力すること」などが見られる。交流及び共同学習において指導をする教師が、特別支援学級の子どもの特性等についての情報を得たり、交流及び共同学習を実施するために必要なことなどの共通理解を図る場の必要性を感じていたりすることが分かる。また、「子ども相互の理解を図るようにすること」、「交流学級の担任として、取組が可能な働き掛けについて情報を得ること」、「特別支援学級の子どものに特別支援教育支援員などが付き、全体と活動しやすくすること」が必要であるというような意見もあり、交流学級の担任として、どのように指導すればよいか迷っている教師もいることが分かる。

さらに、「交流学級の子どものにも有効な指導法について研修を深めること」、「授業以外でも、子ども相互の自然な関わりが生まれるような取組を工夫すること」が必要であるといった、交流及び共同学習のねらいを十分に把握して指導している教師もいる。教師によって、考え方や取組に差があることが分かる。

(3) 交流及び共同学習の実施状況等調査からのまとめ

ア 交流及び共同学習の実施に当たっては、情報交換や情報共有などによる共通理解が効率的、効果的に進められるよう連携の在り方について整理する必要がある。

イ 交流学級や教科担任等の思いや専門性なども大切にしながら、授業の目標に基づき、具体的な活動の進め方や子ども相互の関わり方などを明らかにする指導の在り方について整理する必要がある。

3 関係する教師間の連携と子どもへの指導の在り方

(1) 学習環境の整備と特別支援学級の子どもの実態把握

ア ICFの考え方を踏まえた学習環境

交流及び共同学習を充実させる上で、特別支援学級の子どもの学習環境について、ICF（国際生活機能分類：International Classification of Functioning, Disability and Health）の考え方を参考にした。

ICFでは、人間の生活機能は「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の三つの要素で構成されており、それらの生活機能に支障がある状態を「障害」と捉えている。そして、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子等と相互に影響し合うものと説明され、構成要素間の相互関係については、図10のように示されている。^{*2}

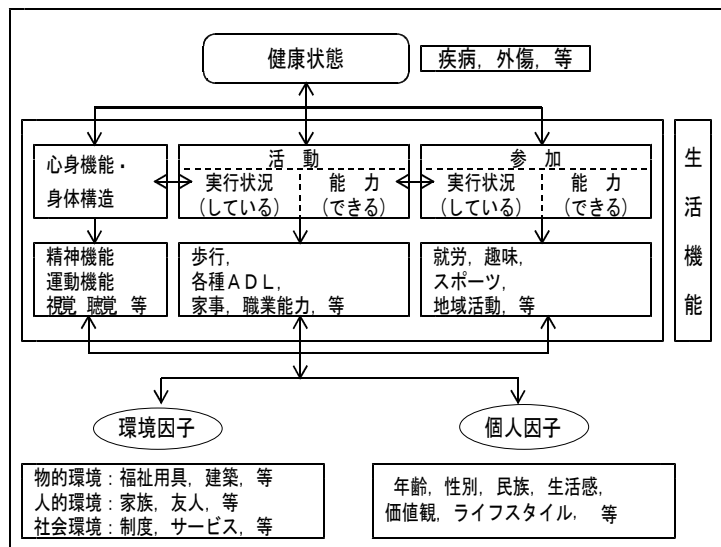


図10 構成要素間の相互作用（概念図：具体例が入ったもの）

図10のように示されている。^{*2}

このような、ICFの視点から、個人因子だけでなく、教師は特別支援学級の子どもが交流及び共同学習の際に困難を感じている状況を把握して、人的環境や物的環境を整えていく環境因子についても整備したい。人的環境について具体的には、交流学級担任や教科担任等の言葉掛け、関係する教師の指導方法、更に一緒に学習する交流学級の子どもとのペア・グループ学習等での関わり方などを整えたい。また、物的環境については、交流学級の教室や特別教室などに必要なものを精選して配置することや、構造的な板書の工夫、大事な部分を捉えることができるように視覚的な支援の工夫をすることなどが大切である。

イ 子どもの特性等の把握について

交流及び共同学習の実施に当たっては、特別支援学級の子どもの特性等を把握し、指導の在り方について共通理解を図った上で指導していく必要がある。そのために、どのように連携を図りながら実践するのかという、関係する教師間の連携と子どもへの指導の在り方について整理することが重要である。

具体的には、図11のように子どもの得意・不得意や友達との関わり方など、特別支援学級の子どもの様々な情報を把握しておくようにする。そうすることで、交流学級の担任や教科担任は、授業の際に子どもの実態に応じた指導の工夫をしたり、子どもが困難を感じている状況のときに戸惑うことなく対応したりすることができるものとする。



図11 子どもの特性等の把握

(2) 連携と指導の基本的な考え方

本研究では、調査結果等を踏まえ、交流及び共同学習実施の際の教師の「連携」と子どもへの「指導」について次のように考えた。

【連携とは】

交流及び共同学習の実施に関係する教師が、同じ目的をもって、様々な機会に連絡をとり合いながら、共通理解を図り、協力し合ってそれぞれの役割を実践すること

【指導とは】

連携で得た情報や役割分担を基にして、特別支援学級と交流学級の子どもに学習方法や内容、関わり方を示し、それぞれの学習目標を明確にし、到達させること

また、これまでに本校で行っていた、関係する教師間の連携と子どもへの指導についての取組を表2に示した。

表2 交流及び共同学習の実施に関する、教師間のこれまでの取組

時期	連携に関する具体的な取組	指導に関する具体的な取組
学 習 前	○ 学年会・学年部会などでの共通理解 ・ 特別支援学級の子どもの特性等などについて ・ 教科等の授業（指導内容や指導観・個人目標など）について ○ 授業準備の時間 ・ 特別支援学級の子ども様子について ・ 時間割の急な変更 ・ 準備物、当日の具体的な活動について ○ 学校・学年行事等、緊急連絡事項などについての対応策など	○ 子どものモデルとなるような教師の言葉掛けの検討 ○ 子ども一人一人に応じた学習指導の検討 ・ 特別支援学級での指導内容の活用の視点 ・ 子ども同士のペア・グループ学習など、関わり方の視点 ○ 障害理解教育について（日常的に）
学 習 中	○ 授業・指導中 ・ ティーム・ティーチングによる授業の実際 ・ 学校行事・学年等行事における、臨機応変な対応 ○ 役割分担による共同実践	○ 指導者の意図的な言葉掛けやペア・グループ学習、教材・教具の工夫などによる言語活動の充実 ○ 体験活動の重視による、注意・集中の喚起と子どもが自ら活動できる状況づくり
学 習 後	○ 学年会・学年部会などでの振り返り ・ 教科等の授業について（個人目標の達成状況など） ・ 特別支援学級と交流学級の子ども様子や関わりについて ○ 今後の授業方針の検討 ・ 特別支援学級と交流学級の子ども達成目標について ・ 準備物、当日の活動の工夫について	○ 授業後の当該学級の子どもへの関わり方に関する具体的な言葉掛け ○ 子ども相互の関わりが継続していくような指導の工夫 ○ 生活に生かすようにするための家庭学習などの工夫

さらに、これまでの本校の取組を基に、「連携の在り方」と「指導の在り方」として整理し、関係する教師間の連携と子どもへの指導の在り方について具体的に示すことで、交流及び共同学習を指導する教師にとって取り組みやすいようにした。

ア 「連携の在り方」について

(ア) 「連携の在り方」の項目について

交流及び共同学習における指導に関係する教師間での「連携の在り方」としては、表2を基に、いつ、誰が、どのようなことを連携するか明確にすることを目的として、以下のように情報提供、情報交換、情報共有、共同実践の4項目に整理した。

情報提供	特別支援学級の担任が交流学級の担任や教科等担任に対して、特別支援学級の子ども特性等についての情報を提供すること
情報交換	特別支援学級及び交流学級における指導計画や指導方法などについて、情報を交換すること
情報共有	関係する教師が、情報交換により知り得た情報のうち指導内容や指導方法、教材・教具等について準備を行い、共同実践できるように情報を共有すること
共同実践	関係する教師が、学習の際に共有した情報を基に共同実践すること

また、それぞれの連携の項目について、取り組む内容、機会・方法、連携のためのツールを表3のように整理し、研究実践に取り組むことにした。

表3 連携の進め方

連携項目	連携の内容	連携の機会・方法	連携のためのツール
情報提供	- 特別支援学級の子どもの特性 - 特別支援学級で行う指導方法 など	連絡会の開催の機会（関係する教師が集合して）	- 個別の指導計画 - 学級の時間割 など
情報交換	- 特別支援学級と交流学級の子どもの学習の様子や関わり方について - 教科等の学習内容や指導方法 - 有効な教材・教具 など	- 授業の準備の時間 - 毎週の学年会などの機会（関係する教師間で、必要に応じて実施）	- 月・週行事計画 - 教材・教具 - 教科等指導計画 - 連絡帳 など
情報共有	- 共同実践に係る子どもの特性 - 実際の指導方法 - 教材・教具の使い方 など	- 連絡会の機会 - 授業の準備の時間 - 毎週の学年会などの機会	- 個別の指導計画 - 学習指導案 - 教材・教具 など
共同実践	- チーム・ティーチングによる指導と役割分担 - 役割分担による授業の準備 など	- 授業中の役割分担 - 学習の時間のチーム・ティーチングの実施	- 学習指導案 - 教材・教具 など

そこで、連携の在り方について次のように整理した。（図12）

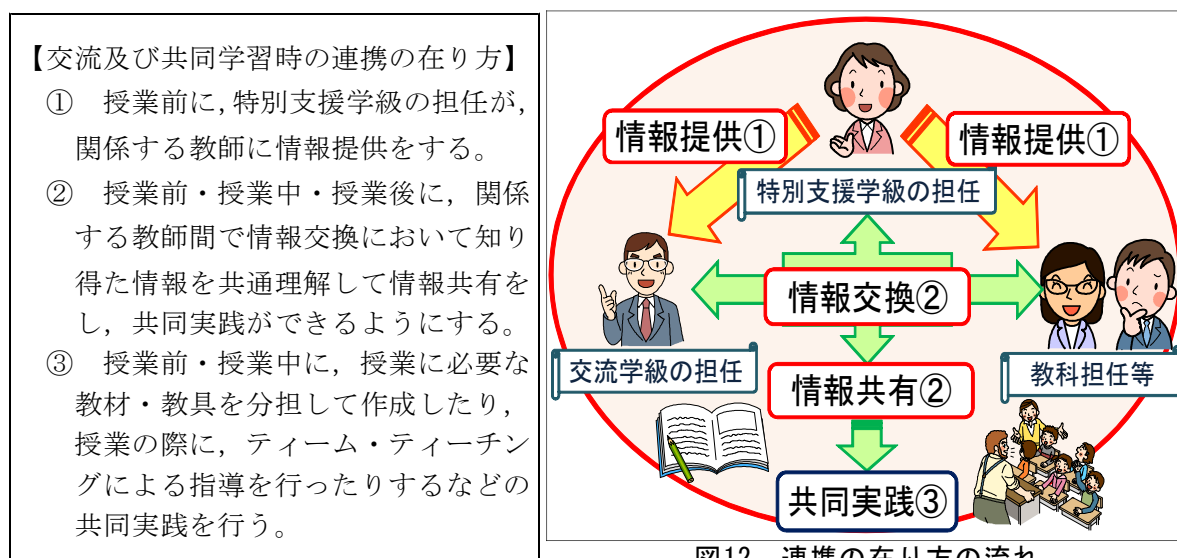


図12 連携の在り方の流れ

(イ) 連携の時期、取り組む際の留意点

整理した情報提供、情報交換、情報共有、共同実践の連携の4項目について、年間を見通して、いつ、どのようなことに留意して連携を図るのが分かるように、表4を作成した。

表 4 連携の時期と取り組む際の留意点

学期	1 学 期	2 学 期	3 学 期
連 携 項 目 ・ 留 意 点	情報提供 ○ できるだけ早い時期に開催する。(教科等の時間割や教師などが決定後) ○ 特別支援学級の子どもと交流学級の子ども双方の情報について提供する。 	情報提供 については、子どもに関する新たな情報を知り得たときや、特別支援学級に転入生が来たときなど、必要に応じて行う。その場合は、改めてメンバー全員が集合するのではなく、学年会等の機会に特別支援学級の担任が、交流学級担任や教科担任等の教師に情報を提供する。	情報提供 ○ 交流及び共同学習における反省及び次年度の教科等の指導について情報提供をする。 
	情 報 交 換		
	○ 特別支援学級担任と交流学級担任(教科担任等)の双方が、積極的に情報交換し、新学期のスタートがスムーズにいくようにする。		
	○ 時間割の変更等で、教師の連携不足により子どもの学習に支障をきたすことのないように留意する。特に学校行事の学年で取り組む種目、参加方法、準備物や予定変更などの連絡は早めに知らせるよう徹底する。 ○ 新年度の方向性について、情報を交換し合い、学年末の諸帳簿関係の記入等について情報交換ができるようにする。 情 報 共 有  ○ 情報提供、情報交換で知り得た情報は取扱いに十分留意する。 ○ 特別支援学級担任は、交流学級担任だけでなく、必要に応じて関係する教師とも情報共有をしたり、次の担任等に引き継いだりする。 ○ 指導方法や、役割分担をして作成した教材・教具等について、子どもにとって有効であるものは、他の教師に知らせたり、他教科等においても継続して使用したりする。 共 同 実 践 学校行事や給食指導、清掃指導など、交流及び共同学習を実施している学校生活の様々な場面において、関係する教師が共通理解して共同実践をする。 		

(ウ) 特別支援学級の担任が進める年間の連携と指導計画

特別支援学級の担任については、年度当初から、交流及び共同学習の計画を立て、実際に子どもの指導をする教師と連携を図って取り組む必要がある。そこで、表5のように学校や各学年の行事予定の主なものについて、具体的な連携と指導計画を関連させながら作成し、連携の内容（具体的な指導）と役割分担、連携を図る際に必要なツールを明示した。これは、初めて特別支援学級の担任になった教師でも、見通しをもって、円滑に交流及び共同学習を実施するためのものである。

年間の連携と指導計画の中でも、特に年度当初に重点を置く必要がある。年度当初は、担任や学級が変わることで、特別支援学級に在籍する子どもは、いつもと違う状況に慣れることに時間が掛かるため、落ち着かない状況になりやすい。そこで、交流及び共同学習を実施する前に、特別支援学級の子どものをよく知るための情報提供をしたり、互いの学級の様子について情報交換をしたりして、子どもが落ち着いて学習できる状況づくりに取り組む必要がある。特別支援学級の担任から呼び掛けることで、交流学級の担任や教科担任等は、具体的な取組が分かり、指導しやすくなる。そうすることで、特別支援学級の子どもは、新学期の早い時期に、交流及び共同学習の時間においても落ち着いて学習に取り組むことができる状況づくりが可能であると考ええる。

表5 特別支援学級担任が進める年間の連携と指導計画（例）

月	主な学校行事等及び連携の機会と項目	主な連携の内容と役割分担	連携を図るためのツール	特別支援学級の学習や行事
4	始業式・入学式 新任式 身体計測・視力 聴力検査 歯科検診 給食開始 交通教室 学級開きの会 学級PTA 家庭訪問 知能検査 委員会活動開始 ○ 関係する教師による連絡会→情報提供 ○ 学年会など→情報交換 ○ 情報提供・情報交換→情報共有	【情報提供】 交流及び共同学習に関する教師全員 - 交流及び共同学習について、目的や特別支援学級の子どもの実施状況等について共通理解を図る。 - 特別支援学級の子ども一人一人について、特性や個人の学習等の得意・不得意、支援の方法、保護者の要望等について情報提供をする。 - 特別支援学級で使用している教材・教具等について提案する。 - 学年会計・特別支援学級会計について 【情報交換】 特別支援学級担任と交流学級担任及び教科担任等の教師 - 交流及び共同学習を実施する教科等の特別支援学級の子どもの個人目標などについて話し合う。 - 学年の子どもの関わり方や学習の様子について情報交換をする。 4・5月の行事についての役割分担等を話し合う。（実施時期、方法、内容、準備の役割分担等） 【情報共有】 - 指導方法や教材・教具等の活用の仕方などについて情報共有を図る。 【共同実践】 〇〇の時間にティーム・ティーチングによる授業を行う。	○ 教育課程（補助資料） ○ 個別の指導計画（前年度分） - 新規入級の子どもについては、特別支援学級担任がその時点で把握している状況を簡単にまとめたもの ○ 家庭環境・安全に対する意識・行動範囲等 ○ 保健調査票やアレルギー調査、仲良し給食依頼文書等 ○ 連絡会文書、各種資料等 - 自己紹介カードや連絡帳などを利用して、子どもや家庭との連携を図る。 ○ 各週の時間割・学級通信・学年通信・学年会計等（毎週・毎日） ○ 学校・学年行事計画書 ○ 家庭訪問日程表（予定）	歓迎の会 学級開きの会（学級行事）

3	授業参観 学級PTA お別れ会 卒業式練習 卒業式 修了式 離任式	【情報提供】 特別支援学級の子どもの学習状況や保護者の考えなどについて情報提供をする。	☐ 特別支援学級の子どもの個別の指導計画 ☐ 保護者との教育相談の内容をまとめた資料（必要に応じて） ☐ 教育課程（補助資料） ☐ 成績表（通知表） ☐ 卒業式などの行事等計画	お別れ会
	☐ 引継ぎ資料作成 ☐ 関係する教師の連絡会→情報提供 ☐ 学年会など→情報交換	【情報交換】 - 本年度の交流及び共同学習を実施しての評価や改善点について情報交換をする。 - 交流及び共同学習を実施している教科等の子どもへの評価や通知表への記述について、情報交換を行いながら検討する。 - 特別支援学級の子どもが今後の交流及び共同学習を実施する教科等について、関係する教師間や特別支援教育校内委員会等で情報交換し、決定する。 - 学級編制のための情報交換をする。 【情報共有】 - 情報提供や情報交換により得た、評価などの必要事項について情報共有をする。 - 特別支援学級の子どもが新年度に交流及び共同学習を実施する教科等や子どもの特性に応じた指導方法などの、学級編制のための情報について、情報共有をする。 - 情報共有をした内容について、次学年の引継会の際に、確実に引き継ぐようにする。	☐ 学級編制のための資料 ☐ 引継ぎ資料 ☐ 交流及び共同学習を実施した教科等について、一年間の成果と課題についてまとめた資料 ☐ 転出入等の有無について（必要に応じて） ☐ 各週の時間割・学級通信・学年通信・学年会計等（毎週・毎日） ☐ 学年会計等 ☐ 連絡帳 など	

イ 「指導の在り方」について

特別支援学級と交流学級の子どもの実態を把握し、関係する教師間で連携を図ることにより、「指導の在り方」について共通理解して、取り組むことが必要であると考えた。

(ア) 特別支援学級での指導方法の活用

まず、特別支援学級で特に重視して実施している、「注意・集中ができるようにする工夫」、「言葉での指示と視覚的な支援」、「前時の学習を想起しやすくする工夫」などについて、交流学級の担任に情報を提供し、教科等でも活用されるよう、情報共有する。

次に、特別支援学級の子どもの特性などから指導方法を考え、交流及び共同学習の具体的な場面で特別支援学級の指導が活用できるよう、図13のように具体的に整理する。併せて、教科の学習指導案や板書計画など、図13の内容を書き込むとともに、役割分担を明確にして授業準備と授業を行うことが大切であると考えた。

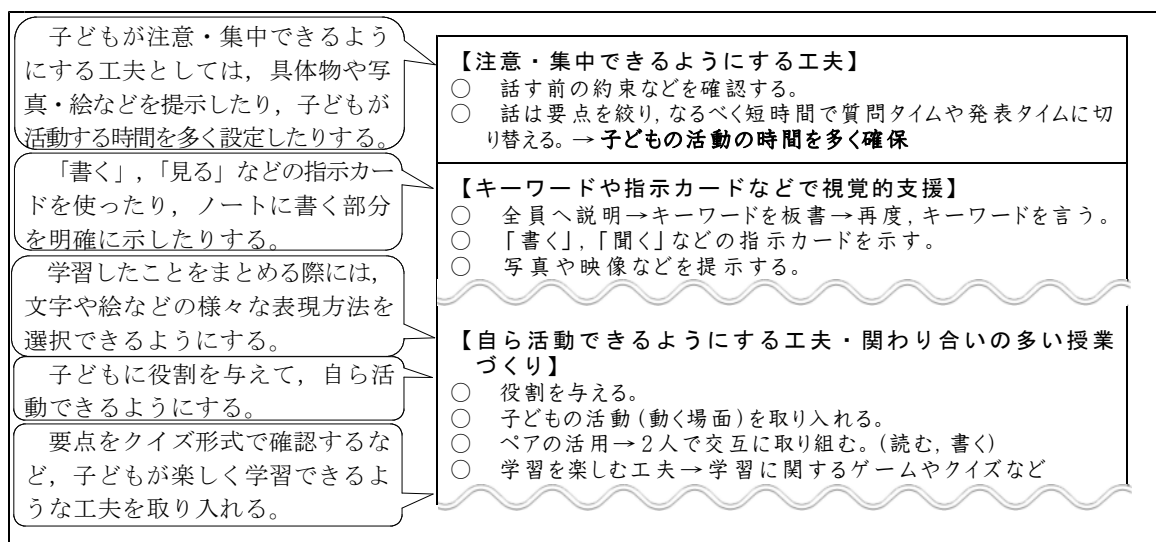


図13 交流学級における指導の具体例

(イ) 互いの考えを伝え合うことができる学習環境の工夫

特別支援学級の子どもが、教師や交流学級の子どもに伝えたいと思うような学習環境の工夫として、ワークシートの工夫やノートのとり方の指導による個人の考えの整理と、グループ学習などの意図的な発表の機会の設定があると考えた。学習環境の工夫の具体例を次に示す。

- ・ 写真や絵などの手掛かりを準備し、子どもとやりとりしながら子どもの伝えたい言葉を引き出したり、モデルを示して教師や友達と一緒に動作に合わせながら発言できるようにしたりして、発表できる状況づくりを行う。
- ・ 特別支援学級の教師は、特別支援学級の子どもが表現した言葉を補足しながら伝えたり、書いたりできるようにする。また、交流学級の子どもの言葉を分かりやすく言い換えたり、補足したりすることで、特別支援学級の子どもに伝わりやすくする。

(ウ) 体験活動の重視による、子どもが自ら活動できる状況づくり

子どもの興味・関心を踏まえて、授業の中に具体物の操作や観察、身体表現などの体験活動を多く取り入れることで、特別支援学級の子どもが教師や友達に関わり合って学習したいと思うような工夫が大切である。また、特別支援学級の子どもが集中できない状況を想定し、他の子どもの役に立つ簡単な役割を与えるなど、実態に応じて子どもが実際に活動する機会が多くなるような、指導の工夫を行うことにした。このように、交流及び共同学習の場においても参加の機会を増やし、子どもが自ら活動することによって達成感を得られるような状況づくりをすることが大切である。

4 授業による研究の検証

(1) 検証授業のねらい

交流及び共同学習における子どもの学び合う姿の捉え方を整理し、「連携の在り方」と、「指導の在り方」を基に、交流学級の社会科と理科の授業におけるティーム・ティーチング（以下、T・Tと表記）を通して具体的に明らかにする（交流学級の担任をT1、特別支援学級の担任をT2と表記する）。

(2) 検証授業の概要

ア 対象（教科、授業学年、人数、学級の様子）について

検証授業は、第3学年の2学級において、交流及び共同学習を実施している社会科と理科

の時間に実施した。これまでの生活科で取り扱われた領域が社会科と理科と分かれることにより、戸惑う特別支援学級の子どもは多いと思われる。また、本校教師への意識調査でも、交流及び共同学習において実施しにくい教科等として挙げられていることから、本研究の考え方を基に授業を行い、その有用性について検証を進めた。

○ 検証授業Ⅰ（6月，理科）
・ 3年2組（30人）
・ 知的障害特別支援学級在籍A児に，交流及び共同学習を実施
○ 検証授業Ⅱ（10月，社会科）
・ 3年1組（33人）
・ 自閉症・情緒障害特別支援学級在籍B児に，交流及び共同学習を実施

イ 方法

○ 特別支援学級の担任と交流学級の担任における連携の機会と方法，ツール
【情報提供】 特別支援学級の子どもの個別の指導計画，特別支援学級の指導方法など
【情報交換】 学習指導案，特別支援学級の子どもの個人目標，授業前の打合せ時間の設定，FAXなどによる事前の連絡，授業準備の時間や授業後の学年会等での授業反省と課題の改善について など
【情報共有】 特別支援学級の担任と交流学級の担任が分担しての，教材・教具等の作成，特別支援学級の子どもの指導方法などについての情報共有
【共同実践】 教材・教具等の役割分担による準備，T・Tによる授業の役割分担
○ 指導の在り方
【特別支援学級での指導方法の活用】 特別支援学級で使用している教材・教具等，特別支援学級の子どもの特性に応じた指導方法の活用 など
【互いの考えを伝え合うことができる学習環境の工夫】 ペア・グループ学習の活性化，教師の子どもへの言葉掛けやモデルの提示 など
【体験活動の重視による，子どもが自ら活動できる状況づくり】 子どもが活動する時間を多く設定すること，見通しをもって自ら学習できるようにする工夫 など

(3) 連携に基づく指導

ア 子どもの実態把握と授業づくりのための連携

「連携の在り方」を踏まえ、授業前に特別支援学級在籍の子ども（以下、検証授業Ⅰの対象児をA児，検証授業Ⅱの対象児をB児と示す）A児とB児の実態やそれぞれの実施する教科である理科，社会科の授業のポイント，身に付けたい力などについて話し合う時間を設定した。

また、授業参観とVTR撮影による分析を行い、交流学級の子どもたちの実態を把握した。特別支援学級在籍の子どもについては、個別の指導計画を参考に得意なことと不得意なことを把握し、共同実践を行った。

イ 個別の指導計画の提示について

(ア) 交流及び共同学習を実施する教科等全てに共通する内容

特別支援学級の子どもの実態と教育的ニーズから、個別の指導計画に交流及び共同学習の時間における指導計画を位置付け、交流学級担任に情報提供をし、情報共有をした。交流学級担任の特別支援学級の子どもへの言葉掛けの工夫により、交流学級の一員として学習しているという意識をもつことができるようにすることで、子どもは意欲的に学習に取り組むことができると考える。また、特別支援学級での指導内容等を交流学級においても同じように行うことで、指導計画に基づいて学習したこと，例えば，教室を出るときは，教師に伝えることなどが日常生活においてできるようになることをねらっている。

交流及び共同学習の場での指導計画例
○ 交流学級に来たときは、「〇〇の授業に来ました。」、遅れたときは「遅くなりました。」などと、担当の教師に報告し、自分の存在を知らせることができる。 ○ 授業中教室を出るときは、必ず担当の教師に伝えてから出ることができる。 ○ 友達や教師と話すときには、相手の顔を見て最後まで話すことができる。 ○ 友達や教師の話を聞くときは、相手の顔を見て最後まで聞くことができる。 ○ プリント等を配るときには、後ろの人に「はい、どうぞ。」と言って手渡すことができる。 ○ プリント等を配ってもらうなど、感謝の気持ちを表したいときには、相手を見て「ありがとう」と言うことができる。 ○ 悪いことをしてしまったときは、「ごめんなさい。」と言うことができる。 ○ 交流学級での授業が終わったら、「教室に戻ります。」などと、担当の教師に報告をしてから戻ることができる。

(イ) 交流及び共同学習を実施する教科等ごとの個別の学習目標の明確化

交流及び共同学習において
は、子どもが教科等のねらい
を達成できるようにすること
が重要である。

そこで、共同実践を行う際
に、学習指導案の教科等の目
標の設定については、交流学
級の目標に基づき、個別の目
標を設定しておくことが大切
であると考え、表 6 のように
評価資料を作成した。

さらに、個別の学習目標と
評価規準を交流学級の担任と
の情報交換により、情報共有
することにした。

ここで、気を付けたいこと
は、特別支援学級の子ども
の実態などを考慮して個別の目
標を設定することである。例
えば、特別支援学級の子ども
の実態や交流学級の子ども
の様子などに応じて教師や友達
と一緒に活動することで目標
を達成するなどである。

表 6 社会科における学習目標と個別の目標

第 3 学年社会科「工場の仕事」における評価資料 (7/8)
学 習 目 標
工場の見学をして分かったことや自分が考えたこと などについて、まとめたワークシート（新聞形式）に 沿って発表することができる。
評価方法：発表場面や資料活用に関する行動観察、 ワークシートへの記述を基に評価する。
評 価 規 準
資料を活用して、かるかん工場とそうめん流し器工 場の様子を比較して、工場の工夫に気付き、まとめた ワークシート（新聞形式）を基にグループで発表でき る。
個 別 の 学 習 目 標（B児）
前時までの教師の指導を基に、工場の見学をして分 かったことなどについてまとめたワークシートを見な がら教師と一緒に発表の練習をし、一人で発表するこ とができる。
個別の目標についての評価規準（B児）
教師と一緒に資料を活用しながら、かるかん工場と そうめん流し器工場の様子を比較して工場の工夫を話 し合うことができる。 教師と一緒にまとめたワークシート（新聞形式）を 基に発表の練習をし、一人で発表できる。

(4) 検証授業Ⅰ（3年理科）の実際

ア 連携の工夫

(ア) A児及び交流学級の子どもの実態

A児は理科の授業への興味・関心が高いことから、離席の回数が少なく、観察や実験に熱心に取り組んでいる。視覚的な情報を捉えることが比較的得意であり、観察の際に実物を見ながら絵を熱心に描く。言葉による表現や文章記述については、一節ごとに教師に確かめながら書くなど、支援が必要である。また、様々なことに興味を示すが、注意・集中が持続しにくい面も見られる。

交流学級の子どもたちは、A児に気軽に話し掛け、温かく迎え、困っている様子の友達に気付き、言葉掛けをする姿も見られる。しかし、実際の学習活動において多くの子どもは自分の活動に一生懸命になり、周りの様子は見えていない場合が多い。

(イ) 共同実践に向けた情報交換で使用した連携のためのツール

以上のように把握した実態と教育的ニーズを整理し、A児の個別の指導計画に交流及び共同学習を位置付け、交流学級担任に情報提供をしたり、交流学級の子どもとの関わりや表7の指導・評価計画などについて情報交換したりして、指導方法等についての情報共有を行った。

表7 単元「昆虫を調べよう」指導・評価計画（全8時間）

次	主な学習活動	教師の指導(交流及び共同学習の視点) 【 】は重点評価項目及び評価方法
一次 虫のな かまを さが そう	1 いろいろな昆虫の体のつくりを調べて、昆虫の体のつくりをまとめる。(第1・2時) ・ いろいろな虫について、昆虫の体のつくりに着目して比較しながら話し合い、昆虫と他の虫を分ける。 ・ 昆虫の体のつくりについてチョウと比較しながら観察し、昆虫の差異点と共通点について話し合う。 ・ 昆虫について分かったことや自分の考えたことをカードに記録したり、気付いたことを発表したりする。	○ 前単元について話し合い、他の昆虫についての問題提起をすることで、体のつくりや育ち方を調べていこうという関心・意欲を高めるようにする。 昆虫に興味・関心をもち、進んでそれらの体のつくりや育ち方を調べようとしている。 【関心・意欲・態度：行動観察・記録】 ○ 比べる視点を示しておくことで、昆虫の異差点と共通点についてチョウと比較しながら観察できるようにする。 比べる視点が分かって、その体のつくりを観察している。 【技能：行動観察・記録】 昆虫に愛情をもって接している。 【関心・意欲・態度：行動観察・記録】
二次 トンボ や バッタ を 育 て よ う	1 トンボやバッタが、幼虫から成虫になるまでの育ち方を調べる。(第3～5時) ・ トンボとバッタの育ち方について、チョウの育ち方に着目して比較しながら調べ、トンボとバッタの育ち方について話し合う。 2 トンボとバッタの育ち方とチョウの育ち方を比較し、昆虫の育ち方についてまとめる。 ・ 昆虫には、チョウのように卵→幼虫→蛹→成虫の順に育つものと、トンボやバッタのように卵→幼虫→成虫の順で育つものがあることについて話し合い、まとめる。	○ バッタの育ち方について、チョウと比較しながら予想や仮説を立てることで、根拠を明確にして表現することができるようにする。 チョウとバッタの育ち方を比較して、差異点や共通点について予想や仮説をもち、表現している。 【科学的な思考・表現・発言・記録】 ○ 記録カードの書き方を確認したり、ヒントカードを使ったりすることで、よりよい観察記録ができるようにする。 昆虫の体の育ち方を観察し、その結果を記録している。 【技能：行動観察・記録】 ○ 観察カードを基に、昆虫の体のつくりや一定の順序がある育ち方について理解できるようにする。 昆虫の体は頭、胸、腹からできていて、育ち方には一定の順序があることを理解している。 【知識・理解：発言・記録】
三次 昆虫 の す	1 昆虫を探して、それらの食べ物とすみかについて調べる。(第6～8時) ・ どんな昆虫がどこにいるか話し合い、校庭や野原にいる昆虫を探す。 ・ 探した昆虫の食べ物とすみかについて調べ、カードに記録したり、発表したりする。	○ 野外にいる昆虫に興味をもち、どのような場所をすみかにし何を食べているか、予想や仮説を立てて探し、調べることができるようにする。 野外の昆虫に興味・関心をもち、進んでそれらのすみかや食べ物を調べようとしている。 【関心・意欲・態度：行動観察・記録】

み か を 調 べ よ う	2 昆虫以外の動物と周りの環境との関わりについて調べる。 ・ 昆虫以外の動物と周りの環境との関わりについて観察して話し合ったり、資料等で調べてまとめたりする。 ・ 昆虫について学習したことを話し合っ て、まとめる。	○ 調べたことを基に、校内の動物(昆虫)・植物マップを作ることで、動物は、植物を食べたり、すみかにしたりして、その周辺の環境と関わって生きていることを理解できるようにする。
---------------------------------	--	--

(ウ) 連携による確認事項

交流学級の担任との連携により、全体への指示は、主にT1が行い、A児とそのグループへの指導はT2が行うことを確認した。また、大事なことをノートに書く際には、色チョークで囲むなどして、書く部分を具体的に示すことについて情報共有を行った。

イ 指導の工夫

(ア) 特別支援学級の指導方法の活用

学習指導案の本時の指導の欄に、A児の実態を考慮し、特別支援学級等で取り組んでいる指導内容等について記入し、教師間で情報共有をした。

A児が既習事項を想起しやすいようにする手立てとして、黒板に前時に使用した教具や写真と一緒に、キーワードとなるカード等を提示するスペースを設定するようにした。すると、昆虫の体のつくりを確かめる際に、自らその場に行って比較したり、自分の頭や胸、腹に手を当てながら、カードの言葉を見て言ったりする姿を見ることができた。

見通しをもって学習できるようにする手立てについては、1単位時間の活動内容を黒板の右端に流れに沿って提示した。

また、交流学級の担任が、いつ、何(どの部分)をノートに書けばよいかなどを示す指示カードを黒板に提示したり、書く範囲を色チョーク等で囲ったりすることで、ノート記録の際の手がかりにできるようにした。その結果、交流学級の担任が指示カードを提示することで、言葉での指示なしに自らノートをとることができるようになった。文章に書くことが難しい場合にも、絵で描いてもよいことを伝えると、熱心に取り組むことができた。

特別支援学級のA児への指導の実際について、以下に示す。

本時(1・2/8) ○ 目標 いろいろな昆虫の体のつくりを調べて、チョウの体のつくりと比較し、差異点や共通点について考察して自分の考えを表現し、昆虫の体のつくりをまとめることができる。 ○ 個人目標 チョウの体のつくりといろいろな昆虫の体のつくりを比較して調べ、昆虫の体のつくりを知ることができる。 ○ 主な学習活動【導入】 チョウの体のつくりについて話し合い、学習問題をつかみ、昆虫の体のつくりを調べる見通しをもつ場面。		
 は教師の指導  は教師の連携	 はA児の言葉や様子	 は交流学級の子どもの言葉や様子
○ 既習事項を想起しやすくする→前時に使用の教具や写真と一緒にキーワードとなるカード等を板書する。 ○ 昆虫の体のつくりの理解→自分の身体の部分と対応させながら声に出して何度も言語化する。 ○ 何をすればよいかが分かるようにするため→「書く」や「見る」などの指示カードを提示、要点を色チョークで囲む。		○ 昆虫の体のつくりは、「頭、むね、はら」からできているね。 ○ 昆虫の体のつくりを自分の身体と対応させ、何度も言っていた。 ○ 書くところが分かり、漢字を使って、板書をノートに書いていた。 ○ ここを書けばいいんだね。よし。漢字も書いてみよう。
○ 「書く」カードを見て、いつもは時間のかかる子どももスムーズにノートに書き始めた。	○ カナブンとチョウの体のつくりを比較している様子	

A児は、既習事項の提示により、比較して確認したり、キーワードを何度も言って覚えようとしたりする姿が見られた。また、どこをノートに書くのか分かったと、自らノートをとり始め、最後まで書くことができた。

(イ) 互いの考えを伝え合うことができる学習環境の工夫

第3時においては、ノート指導をA児の実態に合わせて行ったり、グループ学習における教師の言葉掛けの工夫などにより、A児が発表できる状況づくりをしたりしたところ、次のような子ども相互の関わり合いの場面が見られた。

グループで話し合う場面では、友達の話の聞いたり、自分の考えを伝えたりすることが難しいこともあり、教師が友達の話をつかりやすく言い換えて話したり、A児の考えを友達に伝えたり、簡単な言葉であれば自分で発表するように促したりした。「一緒にやろうよ。」と子ども相互に言葉掛けができるようにするなどの、継続的な指導が必要であることを交流学級の担任と確認した。さらに、話合いのマニュアルを見直し、発達の段階に応じた、子どもが活用しやすいものにする必要があることも教師間で情報共有できた。

本時（3／8） ○ 目標 バッタの幼虫を飼って成虫になるまで育て、チョウの育ち方と比べて分かったことについて話し合ってみることができる。 ○ 個人目標 自分の考えを教師と一緒にまとめ、グループで表現することができる。 ○ 主な学習活動【展開・終末】 バッタの幼虫と成虫を比較しながら観察し、分かったことについて話し合ってみる。		
 は教師の指導  は教師の連携	 はA児の言葉や様子	 は交流学級の子ども
○ 話合いの進め方（マニュアル）の提示について、教師間で確認	うんいいよ。小さいバッタだよ。	今度は僕に観察させてね。
○ 実物をグループに1・2籠ずつ準備→できるだけ近くで観察できる支援		○ グループのリーダーがA児の意見も聞きながら、話合いを進めることができた。
○ T2は、視点を基に、A児と一緒にバッタを観察しながらやりとりをする。		○ A児に分かりやすく伝えるために言葉を考えながら話す子どもも見られた。
○ T2→子ども同士の関わりを促す言葉掛け・・・A児の言葉を補足し分かりやすいように言い換える、交流学級の子どもにもモデルを示す。 など	○ バッタを観察しながらT2と一緒に予想を立て、自分でグループの友達に伝えることができた。	
○ T2が、A児と話合って、発表内容をまとめ、発表の練習をさせるという役割分担を確認	バッタの絵が上手だね。観察カードを見せて。	うん。いいよ。A君も絵を描くのが上手だね。
○ 発表する内容に沿ったワークシートを準備→グループで話し合ったことを書き込み、書画カメラに写しながら発表することを確認		○ A児は、友達に自分の言葉で伝えたり、ノートを見せてもらった姿勢が見られた。
○ グループの話合いの進め方（マニュアル）の見直しの必要性を教師間で確認	これ、どうすればいいの。	
○ バッタの幼虫と成虫の実物を観察したことで、理解がスムーズであった。		こうすればうまくできるよ。
○ A児は、「次の理科はいつあるの。」とT1に確認し、次の学習を楽しみにしている様子で、特別支援学級に戻って行った。	○ グループで話し合ったことを、全体場で発表する子どもの様子。	○ 自分から友達に関わったり、全体場で発表しようとした姿勢が見られた。

友達に自分の考えを伝えることが難しいA児であったが、T2がA児に分かりやすいように言い換えたり、子ども相互の関わりを促す言葉掛けをしたりすることで、A児の友達に伝えたいという思いが高まり、自ら関わろうとする姿が見られるようになってきた。

第4・5時において、A児は、既習事項を想起したり、学習で予想を立てたりするのが難しいという実態が見られた。そこで、具体的にイメージできるような教材・教具の工夫について、T1とT2が話し合い、役割を分担して準備した。例えば、虫を見たことのある場所を想起しやすいように、校内の地図を準備し、地図と実際の場所と対応させながらT2と話し合うなどして、予想を立てるようにした。

本時（4・5／8）

- 目標 どんなところにどんな昆虫がいるか、予想を基に話し合い、実際に校庭で昆虫を探して、それらの食べ物とすみかを調べることができる。
- 個人目標 教師と一緒にどんなところにどんな昆虫がいるか予想を立て、自分の考えをグループで発表することができる。

グループの友達と校庭で昆虫を探し、それらの食べ物とすみかを調べることができる。

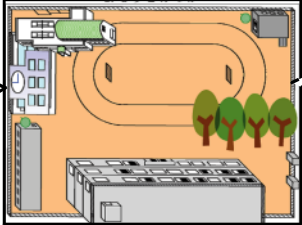
- 主な学習活動【展開】 昆虫のすみかや食べ物について、昆虫を探す見通しをもち、どこにどんな昆虫がいるか予想を立て、グループで昆虫のいそうなところや食べ物を話し合っ
て、昆虫（その他の生き物）を探す場面。

 は教師の指導
 は教師の連携
 はA児の言葉や様子
 は交流学級の子どもの言葉や様子

- 実際に昆虫を探しに行く予定であったが、雨天のため、延期することを教師間で相談し、学習を進めることにした。
- 右の図のように校内の地図を準備しておき、どんな昆虫がいるか予想した場所に貼ることができるようにする。

- T1と一緒に昆虫を見た場所を話し合うことで、色々な季節の昆虫や昆虫を見た場所を想起することができた。

- 隣の子ともペアで、校内で見たことのある昆虫について話し合いながら予想を立てている。
- グループで話し合っグループの意見をまとめる際に、みんなで分担して付箋紙に予想した昆虫と見た場所を記入する。



校内の地図

- 校内の図を基に、どこでどんな虫（昆虫）を見たことがあるかについて話し合った。また、予想したことをノートや付箋紙に、絵で描いてもいいことを伝えた。
- 見たことがある虫を、絵で描いてもいいんだね。いくつも予想できたよ。
- 昆虫がいた場所を、視覚的に確認しながら聞くことができるようにするため→予想を校内地図に貼りながらの発表
- ノートにたくさんの予想を書いたことが自信につながり、自分の考えを発表することができた。



- 予想した昆虫をノートに書いたり、付箋紙に書いたりする際に、文章で書くことが難しい様子であった。
- 記録したい昆虫の取り扱いになろうとするが、班長の子どもがA児を含む子どもの意見を聞き、うまく折り合いを付ける姿を見ることができた。

学校の森に、セミがいると思います。
校庭には、トンボがいると思います。



- 班の予想を発表しながら地図に貼っている子ども様子

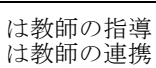
A児は、予想を立てることが難しい様子であったが、校内の地図を提示して場所を確認しながらT2と話したことで、自分の過去の体験を想起し、付箋紙に記入して校庭の地図に貼ることができた。さらに、実際の虫探しの結果を別色の付箋紙に記入して比較することで、経験したことを想起しやすくなり、グループ内で自ら発表することができた。

(ウ) 体験活動の重視による、子どもが自ら活動できる状況づくり

第8時において、A児の学習に参加しづらい状況を見て、T1が出題したクイズの答えである昆虫の絵を黒板に貼る簡単な役割をさせるようにした。この指導により、学習に取り組み始めたA児は、T1から手渡された絵カードを黒板に仲間分けして貼る際に、不足している絵カードがあると、「僕が描いてみる。」と言って、A児自ら得意な絵で板書するなど、意欲的に学習に取り組んだ。交流学級の子どもは、A児の描いた絵を見て、「すごい。」「上手だね。」などと声を掛けながら、A児と一緒にクイズの答えを考える様子が見られた。A児は大変喜んで、互いによさを認め合ういい雰囲気で授業を終了することができた。

本時（8／8）

- 目 標 育てたバッタを小さいときと比較して、差異点や共通点について考察し、自分の考えを表現することができる。
- 個人目標 育てたバッタを小さいときと比較して、差異点について教師と一緒に考え、自分の考えを表現することができる。
- 主な学習活動 【展開】 バッタを育てて、気付いた変化をもとに観察し、分かったことについて話し合ってみよう

 は教師の指導
 は教師の連携
 はA児の言葉や様子
 は交流学級の子どもの言葉や様子

- 昆虫の育ち方に興味をもつことができるようするため→何種類かの昆虫の、二通りの育ち方のうち、どちらの育ち方をするのかクイズ形式で出題
- T2が、T1に提案し、A児に昆虫の絵を黒板に貼る役割をさせることにした（T1が全体へ説明→絵カードをA児へ渡して黒板に貼る）。
- A君、ありがとう。みんな、とても助かるよ。
- これまでの学習の振り返り→自分や友達のよいところ、頑張っていたところなどを賞賛し合うような場面の設定

- 最初はクイズに関心を示さなかった。
- T1が出題した、昆虫の絵カードを黒板に貼るという役割が与えられたことで活動が大変意欲的に変わった。
- トンボの絵がないよ。ぼくが描こう。ほら、できたよ。

- 昆虫の二通りの育ち方についてのクイズに、T1のヒントを聞いて考え、目を輝かせながら回答していた。
- A児の役割を学級の子ども全員が当然のことと捉え、クイズに夢中になっている。聞き逃した子どもも、A児と一緒に考えていた。
- A君、すごい。絵もすごく上手だね。
- A児の行動により、問題が難しいと感じていた子どもも注目して聞いていた。

○ 友達にも「上手だね。」などと言われ、できた喜びを感じ、満足した様子で授業を終えることができた。

単元全体を通して、A児は成功体験を何度も味わい、友達に伝えたいという思いが高まり、分かる・できる喜びを味わうことができた。交流学級の子どもにおいても、A児に分かりやすく言葉掛けをしようしたり、よさを認めたりする姿を見ることができた。

(5) 検証授業Ⅰの考察

連携については、情報提供を積極的に行い指導に生かすことができたが、教師間の打合せを効率的に行うことや、連携後の記録の在り方については課題が残った。

指導については、ティーム・ティーチングによる授業を行ったが、特別支援学級と交流学級の担任との事前の連携により、授業のほとんどを交流学級の担任が一人で進め、特別支援学級の担任は、必要に応じた最小限の指導を行った。子ども同士の学び合う姿を目指すためには、継続的な指導が必要である。

検証授業Ⅱにおいては、連携についてより一層丁寧に取り組む必要がある。

(6) 検証授業Ⅱ(3年社会科)の実際

ア 連携の工夫

検証授業Ⅰの課題を基に、連携と指導について整理し、関係する教師間で打合せを行った。

情報提供として、B児の実態を交流及び共同学習の時間の様子と指導計画から捉え、教師間で情報共有を図った。具体的には、視覚的な文字情報による理解がしやすいこと、学習の手順などが分かり、学習の見通しをもつと落ち着いて取り組むことができること、文章などを書くスピードは速いが乱雑になること、机上などの整理が難しいことなどである。

次に情報交換として、B児と交流学級の子どもの交流及び共同学習の時間の関わり方や交流学級の子どもへの指導、T1・T2の役割、社会科「工場の仕事」の指導計画、時間割、双方の教師の指導観などについて話し合いを行った。さらに、B児の実態に応じた特別支援学級の指導方法や内容などについても共通理解し、情報を共有した。

このようにして関係する教師間で情報共有をし、共同実践に向けた教材・教具の作成や役割分担などを行った。

以下、連携の際に話し合ったことをまとめ、交流学級の担任と共有した資料である。

交流学級担任との打合せの内容	
1 資料	・ 社会科学学習指導案(指導計画) ・ 個別の指導計画、交流及び共同学習における指導計画 ・ 交流及び共同学習についてのまとめ ・ T・Tの活用に関する資料
2 指導計画について	
○ 社会科 単元 「工場の仕事」 学習指導案と指導計画(事前にFAX済み)	
10月4日(木)→見学の計画、見学(工場に連絡後)	9日(火)→見学の見学、まとめ
10日(水)→見学の見学のまとめ	12日(金)→工場の仕事まとめ
3 交流学級担任の思い	
○ 特別支援学級の担任との連携が必要である。	
・ B児の特性について、言葉掛けの仕方について、交流及び共同学習の実施について、積極的な教師の指導の在り方 など	
・ わずかな時間の中で、どのように効率的に支援していくか。	
・ B児の状態について、前回の反省を踏まえた今日の指導についてなど(始まる5分前、終了後5分間)	
・ 教育課程やメール、共有フォルダの活用。時間があるときに見ることができるようにする工夫	
○ 資料活用の力を身に付けさせたい。	
→ 見やすくするために・・・拡大する。見せたい資料だけを提示する。余計な情報を除く。	
○ B児への指導・支援について把握する。	
・ どのようにして集中できるようにするか。	
→・ 約束を決める(時間、合図、範囲など) ・ 体験活動を取り入れる。 ・ 簡単な役割を与える。	
○ 評価方法について	

(ア) 連携後の授業における実態把握

交流学級担任と情報交換を実施した後、検証授業直前の実態把握のための授業参観を行った。1学期の社会科の学習の様子は異なり、B児の大変落ち着いて学習する様子が見られた。1単位時間の授業の導入において、B児に特別支援学級で指導している内容を生かして、視覚的な支援として写真を使って資料を提示した。B児は、前時の学習内容を想起しやすくなり、交流学級の担任が、全体に説明した内容の中で疑問に思ったことを交流学級の担任と丁寧に確認することができた(写真1)。このような指導を通して、B児は本時の学習の見通しをもてたことで安心し、落ち着いて社会科の学習に取り組むことができた。



写真1

(イ) 共同実践に向けた情報共有に基づく授業準備

交流及び共同学習について具体的な指導内容例の中から、B児の指導において効果があると考えられる内容を選び、指導内容を共通理解した。また、このような内容を、学習指導案の本時案に位置付け、教材・教具等を使うなどして指導していくことができるようにした。具体的には、1単位時間の流れを示す表や大事なキーワードを書いたカードなど、

社会科の学習の内容に関わる教材・教具については、交流学級担任が作成し、具体物や資料活用の際の注意・集中を促す矢印、発表の仕方や発表の聞き方などのルールを確認する視覚的支援の教材等については、特別支援学級の担任が作成するよう役割を決めた。授業前の準備の時間に、それぞれが準備した教材・教具を、どのタイミングで、どのように提示するかなどを確認することで情報を共有し、共同実践を行った。

その中で、B児の学習への取り組みやすさを考え、5種類のワークシートを準備することで、B児が使いやすいものを選んで使うことができるようにした(図14)。交流学級の担任と話し合い、交流学級の子どものも使えるように準備しておいたところ、これまで使用していた形式のワークシートも含め、学級の全ての子どもが書きやすいものを選んで学習内容をまとめた。

さらに、学習の見通しをもつことができるようにするための教材・教具など、継続して使用できるものは、できる限り検証授業以外の時間も使用することを教師間で確認した。

図14 子どもが選んで使うことのできるワークシート例

イ 指導の工夫

検証授業Ⅱでは、「指導の在り方」で挙げた、「ア 特別支援学級の指導方法の活用」、「イ 互いの考えを伝え合うことができる学習環境の工夫」、「ウ 体験活動の重視による、子どもが自ら活動できる状況づくり」の3項目について、交流学級の担任と学習指導案の本時案を連携ツールとし、共同実践を行った。その際、記入した指導上の留意点を事前に読んでおき、授業の準備の時間にT1とT2の動きや教材・教具等の提示の仕方などについて情報共有をした。

以下、第3学年社会科学学習指導案の本時案に沿ってT・Tによる授業を実施したときの、特別支援学級の子どもの「分かった・できた」という場面と、特別支援学級の子どものと交流学級の子どもの学び合いにつながっていると思われる場面を中心に、授業記録第6時、第7時から抜粋して示す。

(ア) 特別支援学級の指導方法の活用

B児が、前時の学習を想起しやすくするために、学習の様子を提示したり、見通しをもつことができるように、一単位時間の流れを提示したりして自ら確認できるようにした。

(イ) 互いの考えを伝え合うことができる学習環境の工夫

B児の考えをまとめやすいように、ワークシートを工夫し、5種類の中から選んで使うことができるようにするとともに、学習してまとめたことを自信をもって発表できるようにした。

本時(6/8)

- 目標 そうめん流し器工場の見学に行き、工場の仕事の様子を見学したり、工場で働く人に工場の仕事の工夫をインタビューしたりして分かったことや気付いたこと、自分の考えなどについてかかん工場の仕事と比較しながらワークシートにまとめることができる。
- 個人目標 工場の仕事の様子を見学したり、工場で働く人に仕事の工夫をインタビューしたりして、分かったことなどを教師と話し合い、書きたいことを選んでまとめることができる。
- 主な学習活動 【展開】 そうめん流し器工場に社会科見学に行ったことを想起し、そうめん流し器工場とかかん工場の仕事を比べる視点を基に、調べて分かったことや考えたことワークシート(新聞形式)にまとめる場面。

 は教師の指導
 は教師の連携
 はA児の言葉や様子
 は交流学級の子どもの言葉や様子

- これまでの学習を想起しやすいように、工場見学の様子を映した写真や前時にまとめたそれぞれの工場の資料の提示の仕方について、教師間で共通理解を図った。
- 1単位時間の学習の流れを全員で読んで確認し、いつでも自分で確認ができるよう、黒板に提示することを教師間で共有する。
- ワークシートを5種類準備→自分で選んで使うことができるように提示する。
- マス目の入ったワークシートを選び、T2と一緒にノート記録などを見ながら書くことを決めた。
- 新聞に書きたいことを決めるのが難しかったので、B児がノートに記録していることからT2が選択肢を作り、B児と話し合っって書く内容を選ぶことができるようにした。
- 何を書いたらいいかわからない子どもには、B児と同様に、教師が選択肢をつくり、子どもが書きたいことを選ぶことができるようにした。
- 電子黒板に映された工場見学の時の写真を見ながら、これまでの学習について想起できていた。
- 工場見学の様子を想起しながら、T1の発問に答えていた。
- ワークシートを選ぶことができると聞き、「やったー。」と声が上がった。
- 5種類の中から、子どもがまとめやすいと思うワークシートを選び、書き始める。
- T1が意図したワークシートでないものを選んだ子どもは、ワークシートのそれぞれの違いについて個別に話し合い、納得した上で子どもに合ったものに交換した。
- 何を書くか迷っている子どもは、T1やT2と相談し、ノートやワークシートに記録していることや板書を参考に、選択肢の中から書きたいことを選んだ。
- 早く書こうとして枠から文字が出てしまうようときは、「ゆっくり書こう。」など、文字による情報を示すことで、ゆっくりと丁寧に書くことができた。
- 「先生、ここまで書いたよ。」とうれしそうに見せる子どももいた。子ども相互で見せ合う様子も見ることができた。
- ゆっくり、丁寧に書きます。
- T1に「また今度ね。」などと声を掛け、時間一杯見通しをもって自分で考えながら学習し、満足して交流学級を後にした。
- 机の中のプリント等を持ち、T1に声を掛けて交流学級を出ることを、B児の個別の指導計画を用いて、教師間で確認した。
- かるかんの原料は、うるち米と山芋と砂糖ですと書きます。

B児が一人でまとめることは難しいが、何をどのようにまとめるか教師と一緒に話し合い、見通しをもつことができるようにすることで、B児一人で活動できる場面も多くなった。

(ウ) 体験活動の重視による、子どもが自ら活動できる状況づくり

教師間で授業中に子どもの様子について情報交換し、B児の発表の場を意図的に最初に設定した。B児は電子黒板の操作を行い、画像を示しながら発表したことで、教師や友達に認められ成功体験を味わうことができた。このことにより、授業への集中力が高まり、発表後は友達の発表を最後まで聞くことができた。

本時（7／8）

- 目標 工場の見学をして分かったことや気付いたこと、自分の考えなどについてまとめたワークシートを基にして発表することができる。
- 個人目標 前時までの教師の指導を基に、工場の見学をして分かったことなどについてまとめたワークシートを見ながら発表の練習をし、一人で発表することができる。
- 主な学習活動【展開】 そうめん流し器工場の見学をまとめたときの視点を想起し、自分がまとめたことを発表したり、友達の発表を自分の発表の共通点と相違点を考えながら聞いたりして、工場の見学新聞の発表会をしての感想を発表する場面。

 は教師の指導
 は教師の連携
 はA児の言葉や様子
 は交流学級の子どもの言葉や様子

1番は、まとめたワークシートを読みます。
 2番は、グループで話し合います。
 3番は・・・

○ 学習の流れを全員で読んだ後、一人でつぶやきながら確認する様子が見られた。

○ 発表の仕方と聞き方についてまとめた教材を提示し、全員で読んで確認する。

○ 自分で読んで確認できるようにするため→発表の仕方と聞き方についてまとめた教材を、B児に提示した。

○ 自信のない子どももスムーズに発表できるように発表話型を準備しておくことを確認する。

○ グループの話し合いでは、自分のまとめた新聞を友達に「見せて。」と言われ、それに応じる程度の関わりであった。

○ B児は、発表を待ちきれない様子で、教師と一緒に発表の練習をした。

○ グループの話し合いでは、B児への言葉掛けをどうしようかと迷っている子どももいた。

○ 子どもが作成した工場についての新聞を、電子黒板に映して発表できるようにする。

○ T1とT2は、B児が発表できる状況であることを確認→最初に発表できるようにする。

○ B児は、電子黒板の操作が自分でできる→教師は、必要に応じて支援した。

○ 工場についてまとめた新聞を電子黒板に映し、みんなの前で発表している様子。

○ B児の発表を静かに聞いていた。
「すごい。」
「上手にまとめているね。」
まとめ方や発表の仕方は、あんなふうによければいいんだな。

○ B児が発表を終えると同時に、自然と拍手がわきあがっていた。

○ T1は、B児の発表について、よかったことを具体的に賞賛することで、交流学級の子どもにもB児の頑張りに気付くようにする。また、発表が更によくなるように助言する。

○ 発表後は、発表できた喜びを全身で表現しながら自分の席に戻った。ほめられて満足した表情であった。

○ いつでも自分で確認できるようにするため→B児の手元に全体で使用している教材・教具と同じものを準備しておく。

発表する人の方を見て、静かに聞きます。

○ 発表の聞き方を手元に置き、自分で確認しながら、友達の発表を静かに、最後まで聞いていた。

○ グループの代表の子どもが順序よく発表する。他の子どもは、発表者のまとめ方や思ったことの違いなどを比べながら聞いている。

○ 主な学習活動【展開】 工場の新聞発表会についてまとめ、分かったことを分類・整理する。

○ 交流学級担任の思い→B児に資料活用の力を身に付けさせたい

↓

子どもが何を見るのか分かるよう、全体指導と個別指導で矢印を使用することを教師間で確認する。

○ 子どもが効果的に資料の活用ができるようにするため

↓

資料を電子黒板を使って提示する際、見る箇所を矢印で示したり、赤線を引いたりする。

○ 資料活用の際に見るところを示す矢印を使用→T1の指示した資料を活用することができた。

○ T2に「B君、上手にまとめて発表できたね。」と言ったので、直接B児に伝えるように話し、二人の様子を見守った。

↓

ありがとう。

○ 何をみればよいのかが分かり、集中して聞いていた。また、T1の問い掛けへの反応がよかった。

発表がとっても上手にできていたよ。新聞もうまくまとめることができたね。

○ 交流学級の友達に言葉を掛けられて、にっこりと微笑み、うれしそうな表情であった。

B児は、ワークシートに自分の力でまとめたことが自信につながり、全体場で発表することができた。また、資料活用の方法についても、見る箇所を明確に示すことで、集中力が高まり、理解も深まったようであった。

(7) 検証授業Ⅱの考察

検証授業Ⅱについては、2学期の10月に実施したことで、特別支援学級のB児も交流及び共同学習にも慣れて、1学期に実態調査を実施したときの様子とはかなり違い、落ち着いて学習する様子が見られた。また、1学期には多くの時間、自分の興味・関心のある資料集を見ており、分からないことがあると大声で教師に尋ねたり、気になることがあると離席して確認したりして、友達から注意を受けることもあったが、検証授業においては、全くそのような行動が見られなかった。これは、B児が交流及び共同学習の時間における学習の仕方が分かり、交流学級に慣れてきたことに加えて、交流学級の担任が、B児の行動の特性を把握して指導するようになったことが考えられる。

また、交流学級の子どもにおいても、B児への関わり方が分かってきて、少しずつB児に対する言葉掛けの仕方や好ましい関わり方ができるようになってきたからではないかと考えられる。1学期の早い時期に、このように落ち着いて学習できる状況にしていけることができれば、子どもたちにとって交流及び共同学習の時間が更に充実していくのではないかと考える。

検証授業を振り返り、交流学級の担任と授業反省をする中で、日常的な連携の大切さを再認識するとともに、指導していく際には、共通実践したことを、日頃の授業の中で継続させていくことが重要になってくるということを確認した。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 実施状況調査と意識調査を基に、特別支援学級の担任と交流学級の担任及び教科担任等の連携と子どもへの指導の在り方について、限られた時間の中で効率的かつ効果的に連携することが必要であることなどの課題を明らかにすることができた。
- (2) 子どもの学び合う姿の捉え方を明らかにし、関係する教師間の基本的な「連携の在り方」と「指導の在り方」について整理できた。そして、交流及び共同学習の場である、3年の理科と社会科の時間において、限られた一単元ではあるが、何を、いつ、どのように連携するのかということを、整理し直した「連携の在り方」に基づき、共同実践を通して指導の内容等を工夫したり、学習環境（人的環境や物的環境）の整備を行ったりすることができた。
- (3) 検証授業における成果としては、特別支援学級の子どもが交流及び共同学習の時間において、見通しをもって自ら学習に取り組み、授業の一部の場面で分かる・できる喜びを味わう姿を見ることができた。

ア 連携の在り方を明らかにして取り組んだことで、特別支援学級の子どもの特性等や子どもの教育的ニーズに応じた指導などについて共通理解し、共同実践をすることができた。事前に子どもの特性等に応じた指導の在り方などについて共通理解を図る場を設けて連携を図ったことで、T・Tによる指導の体制をとりながらも、交流学級の担任一人が中心となって授業を進める時間もあった。

イ 特別支援学級の子どもの特性等や子どもの教育的ニーズに応じた指導、特別支援学級等で使用している教材・教具等の準備などを通して、特別支援学級の子どもが、見通しをもって自ら学習に取り組み、進んで全体場で発表するなどの姿を見ることができた。さらに、特別支援学級の子どもが、教師に賞賛されたり、交流学級の子どもに認められたりして喜びを表現する姿を見ることができた。

ウ 特別支援学級の子どものために準備した教材・教具や教師の言葉掛けなどにより、交流学級の子どもたちも見通しをもつことができたり、分かりやすくなったりしたことを、交流学級の担任が気付き、関係する教師間の連携と指導の大切さを改めて確認した。また、検証授業において有効だと感じた指導方法や教材・教具等については、継続して取り組んでいく必要があることも共通理解できた。

2 今後の課題

- (1) 関係する教師の連携と指導の在り方についての課題として、本研究で整理してきたことを基に、既存のものを十分に活用しながら効率的かつ効果的、日常的にできるよりよい方法を、それぞれの学校の状況に応じたものに改善していく必要がある。
- (2) 年間を通した教師間の連携のサイクルを確立するとともに、特別支援学級の子どもの実態を的確に把握し、どの教科等において交流及び共同学習を実施するか十分に検討して取り組むことができるようにしていく必要がある。また、交流学級の担任や教科担任等が特別支援学級の指導方法等に取り組みやすいようにする方法等についても明らかにする必要がある。
- (3) 障害理解教育の視点から、特別支援学級と交流学級の子どもが、よりよい関わり合いをしていくための、関係する教師の「連携と指導の在り方」について、更に追究する必要がある。
- (4) 共生社会の実現に向けて、交流学級の子どもが、特別支援学級の子どもと学習できて楽しい、また一緒に活動したいなどと心から思えるような交流及び共同学習の充実を目指し、教師の連携と子どもへの指導を継続させていく必要がある。さらに、個別的教育支援計画などを利用して、小学校から中学校、そして高等学校へと引き継いでいくことができるような縦の連携の充実にも取り組む必要がある。

〈引用文献〉

- | | | | |
|---------|---|-------|--------|
| ○ 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 総則編』 | 平成20年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編
(幼稚園・小学部・中学部)』 | 平成21年 | 教育出版 |
| ○ 文部科学省 | 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編
(幼稚園・小学部・中学部・高等部)』 | 平成21年 | 海文堂出版 |

〈参考文献〉

- | | | | |
|---------------------------------|--|-------------------|---------------|
| ○ 文部科学省 | 『小学校学習指導要領』，『中学校学習指導要領』 | 平成20年 | 東京書籍 |
| ○ 文部科学省 | 『交流及び共同学習ガイド』 | 平成20年 | 文部科学省 |
| ○ 国立特別支援教育
総合研究所 | 『交流及び共同学習の推進に関する実際研究』 | 平成20年 | |
| ○ 国立特別支援教育
総合研究所 | 『友だちをわかろうとすること，自分を知ろ
うとすること』 | 平成21年 | |
| ○ 鹿児島県総合教育
センター | 『指導資料 特別支援教育（第152号），
（第158号），（第161号）』 | 平成20年，平成22年，平成23年 | |
| ○ 文部科学省 | 『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育
システム構築のための特別支援教育の推進
（報告）概要 資料』 | 平成24年 | 文部科学省 |
| ○ 鹿児島県教育委
員会 | 『平成24年度 人権教育資料 なくそう差別
築こう明るい社会～様々な人権課題を解決
するために～』 | 平成24年 | 鹿児島県教育
委員会 |
| ○ 月森久恵 編集 | 『教室でできる特別支援教育のアイディア172
小学校編』 | 2005年 | 図書文化社 |
| ○ 月森久恵 編集 | 『教室でできる特別支援教育のアイディア
小学校編 Part 2』 | 2008年 | 図書文化社 |
| ○ 花熊暁 編著 | 『通常の学級で行う特別支援教育①小学校
ユニバーサルデザインの授業づくり・学級
づくり』 | 2011年 | 明治図書 |
| ○ 田中文恵・小林繁
著 | 『周りの子とのかかわりを生かした〈教室で
気になる子〉への手だてとヒント』 | 2012年 | 小学館 |
| ○ 東京コーディネー
ター研究会 編著 | 『高機能自閉症，ADHD，LDの支援と指
導計画 ー特別支援教育の手引きー』 | 平成16年 | ジアース教育新社 |
| ○ 東京都日野市公立
小中学校全教師・
教育委員会 | 『通常学級での特別支援教育のスタンダード』 | 2010年 | 東京書籍 |
| ○ 庭野賀津子 編 | 『特別支援教育支援員 ハンドブック』 | 2010年 | 日本文化科学社 |

長期研修者〔前田 博美〕

担 当 所 員〔奥 政治〕

【研究の概要】

本研究は、子どもの共に学び合う姿を目指し、交流及び共同学習において、子どもが分かる・できる喜びを味わうことができるようにするための教師の連携と子どもへの指導の在り方について研究したものである。

具体的には、交流及び共同学習の指導に関係する教師の「連携の在り方」と「指導の在り方」について整理し、より効率的・効果的な教師の連携と子どもへの指導について、交流学級担任とのティーム・ティーチングによる授業を通して検証した。

授業の様々な場面において、特別支援学級と交流学級の子どもが関わり合いながら学び合う場面を設定することができた。そのことを通して、特別支援学級の子どもが分かる・できる喜びを味わっている姿を見ることができた。

【担当所員の所見】

平成16年6月の障害者基本法の改正によって、交流及び共同学習を積極的に進め、相互理解を促進することが規定された。また、改訂された学習指導要領では、このことを踏まえて、交流及び共同学習を計画的、組織的に行うことが明記された。

本研究では、まず、自校への実態調査及び教職員への意識調査を行い、交流及び共同学習の実施上の課題を明らかにしている。そして、その結果に基づき、教師の「連携の在り方」と子どもへの「指導の在り方」を示した。

次に、「連携の在り方」について4項目に整理し、関係する教師が効果的・効率的に連携を行うことができるようにするとともに、子どもが、分かる・できる喜びを味わうことができるような「指導の在り方」を具体的に示した。

また、検証授業において、関係する教師が指導方法等を工夫することで、障害のある子どもと障害のない子どもが、互いのよさを認め合いながら共に学び合う姿を導き出すことができたことは、各学校での交流及び共同学習の実施において、大きな示唆を与えるものである。

今後更に実践を重ね、本研究の成果を還元するとともに、交流及び共同学習を計画的、組織的に行うための方法等についてのより一層の充実を期待する。